

家畜感染症学会創設 20 周年に寄せて



加藤敏英

家畜感染症学会 第3代会長
株式会社微生物化学研究所
酪農学園大学客員教授

この度は、学会創設 20 周年、誠にありがとうございます。思い起こせば、数名の大学教員を中心とする旗揚げメンバーの声掛けにより、日本家畜臨床感染症研究会として産声を上げ、早 20 年。草創期はその発足を待ち望んでいた全国の生産動物臨床獣医師が屋台骨を支え、現在では 400 名を超える会員が躍動する学会として、生産動物領域でその存在感は益々高まっていると言えます。個人的な意見として、この学会が他の学会等と一線を画す特色を持っているとするならば、それは活動のテーマを臨床獣医学に特化せずに畜産学あるいは農学に幅を広げたことが奏功し、家畜に関するいろいろなジャンルから会員が集まっているということでしょうか。獣医学的に薬剤を使用して感染症を治療(予防)する時代から、畜産学・農学を通して家畜の健康を包括的にマネジメントするという時代に変化する過程において、会の名称の変更も含めそれはごく自然な流れだったと思います。

研究会・学会の存在を世に知らしめた活動として、「子牛の科学」(発刊は 2009 年)と「新しい子牛の科学」(同 2021 年)、この 2 冊の書籍の出版が挙げられます。どちらの書籍も子牛が主人公ですが、充実した内容とその読み易さから、おかげさまで多くの方々からご好評をいただいております。2 冊ともお持ちの方は、前

者に比べると後者は畜産学・農学の色合いがより濃いと感じるのではないのでしょうか。「新しい……」は正に時代の流れに沿った後継本であると自負していますが、どちらも広く畜産関係者の手に渡っていることは、学会としてひとつの責務を果たすとともに、認知度上昇にも少なからず貢献できたのではないかと勝手に安堵感を覚えています。ご多忙の最中、執筆にご協力を頂いた先生方には改めてお礼申し上げますとともに、あれこれと雑務に奔走していただいた事務局各位、そして出版社の方々に深謝いたします。

さて、コロナ禍が過ぎ去って、学会活動は再び対面形式へと回帰してきました。web 参加を併用したハイブリッド開催が当たり前になった今、昭和の人間は会場に足を運んでこそその学会であるという固定観念からなかなか抜け出せません。いずれにせよ、この先も、若い世代にも積極的に参加していただける学会であるように願って止みません。そして、本学会が 30 周年 40 周年と続きますよう、今後とも皆様のお力添えをよろしくお願いいたします。

最後に、わずか 1 期 2 年間の会長であったにもかかわらず記念誌への寄稿文掲載の光栄に預かり、ご高配いただいた役員各位に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。